

鄂上清生子金錄

第六卷

野上清生子全集

第六卷

岩波書店

野上彌生子全集 第六卷

第十二回配本(全二十三卷)

一九八一年五月六日 発行

定価三〇〇〇円

著者 野上彌生子

発行者 緑川 亨

発行所 株式会社 岩波書店

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五  
電話 〇三(三六)四二二  
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

©野上彌生子 1981

目次

大石良雄	三
若い息子	八三
夢	一九五
一隅の春	三三
めばえ	三三五
運命	三五
ノツケウシ	二七一
パンドラの箱	二八五
小鬼の歌	二九五
後記	三六三

小  
說  
六



## 大石良雄

元禄十五年二月上旬のことであつた。一つの史的事実に基いて説明すれば、播州赤穂の城主浅野内匠頭長矩が、殿中に於て高家の筆頭吉良上野介義央よひまに刃傷に及んだ咎に依つて、内匠頭は即日切腹、五万石の封地は没収せられ、後嗣に擬せられてゐた弟の大学は閉門仰せ付けられると云ふ出来事があつてから丁度十一箇月目のことであつた。

浅野家の城代家老を勤めてゐた大石内蔵之助良雄よしたもは、当時池田何某と名乗つて住んでゐた京都在山科の邸宅の茶室で、その日大阪から原総右衛門の手紙を持つて訪ねて来た大高源五を迎へた。芦屋風の釜のかかつた炉を前にして、内蔵之助は主人の席に着き、美濃の大判に認めた総右衛門の長文の手紙を一枚々々熱心に読んでゐた。彼は小柄で、身体に釣合つた小さい長目な頭をして、綺麗に結つた髪は稍縮れてゐた。顔は青白かつた、而してやつと四十を出たばかりにしては老けて病人じみてゐた。以前から余り健康でなかつたのに、昨年こぞの心配事でひどく頭を使つたのと、引続き悪症ちやうの疔ちやうを煩つたこぞりしたのが影響してゐるのであつた。

「総右衛門殿の意見は、此間の会合で一通り分つたつもりであつたが、」最後の一枚に目を通し

てしまふと、内蔵之助は初めて口を開き、すべての紙を丁寧に纏めた。「書いたもので見ると、多人数の席上では知られなかつた周密な心遣ひが分つていろ／＼参考になる。貴殿にもわざ／＼御苦勞であつた。」

縞の着物に縞の羽織で、三十の若い商人らしく装つた源五は、この挨拶に対して碎けた身装とは不釣合な、正しく元の二十石五人扶持の小身者が、城代家老に向つた時の堅苦しいお辞儀を一つした。

「総右衛門殿もこの間はちと意気込みすぎて、条理を尽さぬ恨みがあつたと残念がつてをりました。」

源五は態度の割に臆しないはき／＼した話し方をした。整つた顔立で、眼に人の注意を引く賢さがあつた。彼は以前から内蔵之助の氣に入りであつた。

「中々大議論だつたからな。」

「あゝなりますと、言ふ方でも聞く方でも夢中でございますから。」

これは先月の十四日、故内匠頭の命日に當つて、京阪地方に散在してゐる旧藩士たちが京都で落ち合つた時の話である。会合の度にいつも議論を沸騰させる彼等の重大な計画——復讐の問題は、決行期として予定されてあつた三月が逼つたのと、当日は時が時で、主君の不幸な切腹に対して、それから引き起こされた自分達の運命の転落に対して追懐を新たにされたし、且つ大学はまだ閉門さへ許されないのに、遺恨の相手の上野介は無事に隠居が叶ひ、息子の左兵衛佐が家督を嗣いだことが知れ渡



つた後であつたから、一層人々を興奮させ、口々に激しい意見が吐露された。これまで彼等の間に秘密にきしみ合つてゐたものが、明白に二つに分立ただけでも、近頃での興味ある会合であつた。それは復讐に対する自重派と急進派の拮抗で、内蔵之助は同じく山科に住んでゐる従弟の進藤源四郎や、伏見にゐる叔父の小山源五左衛門と共に前者であり、後者は原総右衛門が代表してゐた。この気魄の強い五十五の老人は、初めは山科組に近かつたのであるが、昨年、大高源五と二人で出府して、江戸の過激な復讐論者である堀部安兵衛の一派に接近して以来、彼等の妥協のない行動に共鳴したのである。この間の席上でも彼は盛んに反対派に挑戦した。併し個人としては総右衛門は内蔵之助に同情してゐた。彼の煮え切らぬ態度は、天性もあるが、一つは叔父の影響だと想像してゐた。それ故総右衛門は今一度内蔵之助に自分の所信を伝へ、純理論の見地から彼の反省を促さうと考へた。大高源五は総右衛門の熱心な味方であつたが、今までの関係と、生来の円満な氣質から山科の家にもこだわりなく出入してゐたので、総右衛門は手紙を書き、彼に托して内蔵之助に届けて貰つたのである。

「実はあの場で申上げるのが本統であり、その決心をして参つたものではございませんが、あの通り、話が妙な方へ逸れ出したので、わざと遠慮をいたした、と申すことで。」

源五が何の気なしにさう附け加へた時、内蔵之助の薄い頬の上に不意に女のやうな羞かみの色が浮んだ。その言葉は、近頃内蔵之助が京都や伏見辺で大分遊ぶことに就いて、会衆の或る者が激しく攻撃したことを思ひ出させたのであつた。

「いや、この間は手厳しくやられて大いに弱つた。」

内蔵之助は隠さず打ち出して、鷹揚に笑つた。

「併しそれはそれ、これはこれで。」源五は自分の不用意な言葉の結果にまごつきながら、急いで話題を引き戻さうとした。「大事な目的を控へて、くだらない感情論をいたす者の気が知れませんか。総右衛門殿も自分等が大石殿に反対するのは、議論として反対するのであつて、それ以外の意味は微塵もない。申すまでもないことではあるが、その点は誤解下さらぬやうにと、堅く申しつかつて参りましたやうな次第でございます。」

「そんな心配は要らない。総右衛門殿の気持は、総右衛門殿が考へてゐるよりわしには分つてゐる積りだから。ただ併し折角の忠告ではあるが、この急進説だけは、この間も云つた通り、この儘ではどうも——」

終にその問題に触れかゝると、内蔵之助は手を拱き、首を傾けた。而してちらと膝の前の手紙に投げた眼を炉の上に転じて、程よい火加減でさわやかに鳴り出した釜の音に聞き入るやうに黙つた。庭に面した二枚の障子には、早春の午後の日が明るくさしてゐた。鶯が山家らしく軒近くで、二人の沈黙の中で、頻りに鳴いた。併し源五は、斯んな場合の内蔵之助には此方でぶつ突かつて行かなければ埒の明かないのを知つてゐたから、長くは黙つてゐなかつた。

「総右衛門殿にしても、また手前共に致しまして、徒らに事を急ぐ訳では御座いません。定めて

書中で十分御了解のことゝ存じますが、あなた様方は大学様の御一身が何とかお極まりになるまで手出しは出来ないと主張なさる。総右衛門殿や手前共はそれを待つては却つて拙いと考へる。ただそれだけの相違で——」

「左様。意見の分かれ目は其処だけだ。」

「若し一万石にしろ、二万石にしろ、大学様に新規お取立の御沙汰が下り、先君のお跡も立派に立つやうになつた上で事を挙げたのでは、お上を無視した振舞とも見られ、折角開けた大学様の御運にもさし響く訳かと、手前共はそれを怖れるのでございます。」

「総右衛門殿が一番氣遣つてゐられるのもその事のやうだが。」内藏之助は拱いた手を解き、纏めた手紙を今一度取り上げて、二三枚目の紙を読み返した。「併し、我々の計画はお上を相手にする仕事ではない。目的は上野介にあるのだから、大学様の御落着を見届けた後で事を起したところで、やり方一つでは大学様にお咎めのかからう筈はない。だから諸君もどうか焦慮あせらないで貰ひ度い。而して大学様に依つて幾分でも先君の御面目の立つやう、出来るだけの手段を講ずるのが、寧ろこの際の急務だ、と斯うわしには思はれるのだが、この考へ方が間違つてゐるだらうか。」

源五は返事の代りに凝ちかと彼を見詰めた。高祿の家で太平の安楽な生活に馴れ、昨年的事変に遭遇するまでは、恐らく人生の苦味を少しも知らなかつた中年の男の、細かい優しい眼、覇氣のない円い鼻、柔和なだけに何処か締りのない口許、その容貌から身体のすべてに漂つてゐる消極的な、併し悪の分

子だけは少しもない呑気さと氣弱さの交り合つたゆつたりした様子を見ると、源五は声帯の後に突つかかつてゐる激しい抗弁を——そんな夢をいつまで御覧になつてゐるお積りでございます、大学様と吉良父子に対するお上のお仕打を比べて見れば、今後のことも大抵推量いたされるではございませんか——を、持ち出す勇氣はなかつた。

「それも一理ある御意見として、」源五は努めて平静な調子を取らうと試みながら云つた。

「総右衛門殿や手前共が仮に自説を翻へしたといたしましても、江戸の連中は決して聞き入れませんまいかと思はれます。彼等はこの御一周忌までにはやると仰しやつたあなた様のお約束を、守つて頂き度いと主張いたしてをります。而して手前共の態度をさへ手緩いと攻撃いたしてゐる位でございます。」

「約束を輕んずる訳ではない。併し斯う云ふ問題は、時の情勢で計画通り行かないこともある。」内蔵之助は云ひかけて、先刻の羞恥と同程度の心配をその蒼白な面の上に現はしながら聞いた。「最近に何か便りがあつたかな。」

「はい。」

源五はちよつと云ひ濺いだ。堀部一派の消息が、当然本部であるべき山科よりも自分達の方へ知られてゐることは、内蔵之助に対する彼等の不信と背離を余りに明瞭にする訳で氣の毒に感じたのであつた。併し相手は何等の蟠りもない鷹揚な尋ね方であつたので、源五は堀部安兵衛から二三日前に受

け取つた手紙に就いて話した。――

「上方の連中が何かと理窟をつけて事を長引かせるのは、百五十里も離れてゐるからだ。現在敵の家を目の前に見て暮らす自分達の気持を思つて呉れと書いてございました。」

「――」

「金を持つて呑気に遊んでゐられる人や、医者をしたり、商人になつたりして手まめに仕事にありついてゐるものは、いつまでも待たれようが、我々は初めから仇討専門だ。それを目的に去年赤穂で切る腹も切らずに生きてゐるのだから、これ以上ぐづ／＼してはゐられない。」

「――」

「これまで云つても尚ほ上方で腰が極まらなければ、もう当にしないでこちらだけでやつて見せる。決死の者が四五人も揃へばさうむづかしい事ではないと、斯う云ふ意気込でございます。」

「そんな軽はずみな事をさせてはならぬ。」其処まで何等の抗議も意見も挟まないで聞いてゐた内藏之助が、その時明らかに周章てて遮つた。「先方でもあらゆる警戒を加へてゐる中に、四五人で目的が達せられるなどと思ふのは乱暴な話だ。」

「元より乱暴な話で。」源五はその言葉をすぐ取つて続けた。「併し、堀部は御存じの氣象で、場合に依つてはどんな乱暴もやり兼ねない男でございます。手前共がこの際事を急ぐのを得策といたしますのも、一つは彼等の乱暴を未然に防ぐために外ならないので、でなくしてその儘傍観いたすならば、

さうして万一彼等の企が失敗に終るならば、二度と取り返しをつかない結果に陥るかと考へられま  
す。」

源五の言葉は、不断の慎しみと謙遜を珍らしく忘れる程強く激して行つた。彼は繪右衛門が手紙で  
説いてある筈の他のあらゆる急進説の論拠に就いても、熱心に繰り返した。内蔵之助はそれ等の意見  
に対して最後まで賛否を洩らさなかつた。而かも冷淡ではなかつた。却つて忠実に相手の言葉に耳傾  
けながら、再び手を拱き、力のない弱々しげな眼で、当惑さうに炉縁の尖つた角を見詰めてゐるのを  
見ると、源五は同志の間に近頃恐ろしい勢で燃え上つてゐる一つの疑惑を思ひ出した。この人を我々  
の統領に選んだことが果して賢かつたか。——意見の相違は相違として、源五は人格的には内蔵之助  
の支持者であり、仲間の者ほど失望してはゐなかつたに拘はらず、この時だけは同じ疑に打たれない  
ではゐられなかつた。而して同時に知つた。自分の今日の使命が全然失敗に終つたことを。

源五はやがて帰り支度をした。いつもは用事がすんでも茶の相伴をしたり、俳談を戦はしたりして  
長座になつた。田舎に引つ込んで話相手に飢ゑてゐる内蔵之助は、源五がその方面に嗜みの深いのを  
悦んでもとの地位以上に歓待もしたし、源五もそれに甘えて時には遊びの取り捲までしてゐたのであ  
るが、今日だけは留めても依固地に辞退した。

客が去つて暫くすると、内蔵之助は庭に下りた。

この邸宅はもと伏見の或る商人の別荘で、内蔵之助が昨年赤穂を引払ふやうになつた時買取つたものである。長い間荒れてゐたのを、すつかり手入して立派な邸宅になつたが、殊に庭には惜しまず金をかけてあつた。内蔵之助が自分から樹木や石の布置を差図したのである。梅の花がいつの間にか清明な輝を失つて、わざと等閑に伸ばした垣根の連翹に盛を譲つてゐる。古い松の間に交つてゐる桜は、次の順番を待ちながら、小指の先ほどふくらんだ蕾を薄赤く枝の表に群がらしてゐた。併しこれ等の花の樹木にも増して内蔵之助が愛してゐるのは牡丹と菊であつた。赤穂の邸宅でも此の二つは毎年丹精してゐたから、移転の時持つて来られるだけは持つて来た。而してその秋すでにすやかな花を見せた菊に対して、この春を楽しみにしてゐた牡丹が、数日前漸くはづした霜除の下に、鮮明な茜色の芽を吹いてゐるのを見つけた時には、内蔵之助は子供の如く悦んだ。今も庭に下りると、彼は一番に其処へ行つた。芽は最初の紅から青ずんだ蘇芳に変らうとして、瑞々した円い突起に膨らみ、その中からやがて燃え上る豪華な花卉を約束するかの如く、麗らかな春光の下に輝いてゐた。内蔵之助は庭下駄で、ゆつたりした足どりで、数列に足らぬ花圃を一巡した。彼の顔には先刻茶室で源五と対坐してゐた間の憂色はもうなかつた。内蔵之助はそんな事は考へようとしなかつた。源五がいつになく素気なく帰つたことに対するむつとした気持さへ忘れてしまつてゐた。この牡丹が故郷の庭にあつた日と交らぬ花をつけるかどうか、それ以外のことは念頭になかつた。平和な満足と明るい外光が、一時間前の物憂げな彼とは別人のやうに見えさせた。

その時であつた。裏門の方から線の太い、がっちりした一人の老人が、簡単な外出の身装で、何か気がかりらしく、急ぎ足で入つて来たと思ふと、自分の家のやうな無遠慮さで、声もかけないで、つか／＼と庭の方へ廻つて行つた。

「や、これはようこそ。」

内蔵之助は直ぐ気がついて花園を離れ、母方の叔父の小山源五左衛門の方へ歩み寄つた。

「今日は源四郎のところ用事があつて出掛けて来たのだが。」

源五左衛門はこれだけ云ふと、大きなぎよるとした眼であたりを見廻はすやうにして、源五が訪ねて来たかと聞いた。

「お逢ひでしたか。」

「うむ。元慶寺の手前で見かけたのが慥かにそれらしいと思つたが、向うは気がつかないやうだつた。」

内蔵之助は先刻源五を送り出した茶室に再び叔父を案内して、手を高く打つた。細面の権高な顔をした妻のくり子が唐紙を開けて三指をついた。彼女はいつでも、亦何処からでも、のつそりと入つて来るその叔父の流儀には馴れてゐたから、知らぬ間に其処に坐つてゐるのを見ても驚きはしなかつた。それと共にこの叔父が抹茶の嫌ひなのをも心得てゐたので、すぐ引返して普通の茶道具を運んで来た。併し長居はしなかつた。この茶室で話される話は決して聞いてはならなかつた。聞いても聞かぬ振を



してゐなければならなかつた。「源五は何しに來たのだ。」渴いた咽喉に一と口がぶりと茶を通すと、源五左衛門は飛び着くやうな聞き方で聞いた。「この間おれ達にあれ程楯を突いておきながら、どんな顔があればやつて來られたのだ。」

内藏之助は彼が総右衛門の使で手紙を届けて來たことと、その内容を手短かに話した。が、手紙そのものは、すぐ傍の袋戸の手文庫に仕舞はれてあるに拘はらず、見せようとはしなかつた。

「屹度、そんな事だと思つた。」源五左衛門は想像が當つた人の自己満足で厚い角ばつた顎をうなづかせ、煙草入を取出して、頑丈な銀煙管に一服吸ひつけた。「それで、どう返事をした。」

「どうと云つて、まだ返事は書かないでをります。」

「下手をすると後が面倒だぞ。」

「兎に角、今のところ私は自分の考を變へる積りはしてないのですから。」

「さうだとも、大きにさうだ。」源五左衛門は甥の言葉聞いて安心したしるしに、また一つ顎を動かして、それでも表現が足りないかの如く、煙草盆の灰吹にぽんとよい音をさせて吸殻をはたき出した。「一体物の本を見ても分かる通り、そんな一大事がさう一朝一夕に仕遂げられるものではない。

時機の當來するまでは何年でも隠忍して待たねばならぬ。所謂臥薪嘗胆だ。いや、それまでにしてさへ運が悪ければ失敗しないとも限らぬ。それにあの連中と來たら、たゞ事をあげさへすればよいものゝやうに心得てゐる。成功を急ぎ過ぎる。敵を侮つてゐる。吉良上野介は単に一高家ではなく、上杉